

右御中臈女用ゆ

一中かもし 降り揚げ

しまだ 緋太 からわ 雙髪 まへづと 前蟬髻

右御小性女用ゆ

一中かもし 降り揚げ 中形のかたはづし

右表使女御側御次女用ゆ略^{○下}

〔婚禮法式〕婚入之部

一 婚入の時、御料人并召連候女房衆髪結やう、髪にはかづらを入れ、わけめを三所立、入元結にてむすび、其下を水引にて三所結也、若き人は一とこゝろゆひ、又其を平元結にてゆふ也、

〔婚禮問答〕姫君并召れ候女中髪は下げ髪たるべきや如何、髪はかもしを入れ、わけめを立て、大元結にてゆふべし、今時すべらかしと申體也、

〔後松日記〕婦人は髪を垂たれば、頭をおほふに及ばず、略^{○中} 義髻といふものや後の世のかづらを入たるなり、このかづらを武家にてあまた所ゆへども、こは晴にはとくべきものなり、

〔三十二番職入歌合〕五番 右

花かづらおち髪ならばひろひをきひねりつぎてもうらまし物を

二十一番 右勝

鬘ひねり

うつくしくか、れとしてしもうば御前はよめがかづらを捻らざりけむ略^{○中}

歌がらのゆらくとなびやかなるさま、たがねくたれの枕の上、たがうしろてのふさやかなるそぎめにも、かゝる玄なはありがたくこそみたまふれ、かづら捻といへば賤きやうなれど、かの常陸の宮の御むすめも、我おちかみをこそ薫衣香の壺にそへて、乳母の侍従にもたびけれ、いやしきあまのすさみにも、たゆまじき道のすぢは、詞の玉かづらにて侍りけり、

鬘捻